（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書

令和６年９月３０日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　　文理学部　（人文科学研究所）
資格・氏名　　教授・キャラカー　リチャード
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和６年度海外派遣研究員（　短期Ｂ　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ｂ
２　研究課題

社会言語学におけるアイルランド英語の地方方言に関する調査

３　派遣期間　　西暦２０２４年８月４日　～　２０２４年８月３１日
４　派　遣　先　　アイルランド　ダブリン
５　研究目的

2023 年に Perceptia Press より出版された自著 *Linguistic Soup: Recipes for Success* は、応用言語学の様々な側面を学ぶこと、そして読む・書く・聞く・話すことのスキルを向上させることに関心のある日本の大学生向けの CLIL 教科書です。次回の版では、第 3 章「Sociolingistics」をアイルランド英語の地方方言に焦点を当てた内容に改訂する予定です。

現代のようなコーパス言語学の時代、人々はアイルランドを実施踏査することなく、またアイルランド語が実際にどのように使われているかをまったく理解することなく、大量のアイルランド英語の言語データを取得できます。その代表例が、さまざまな研究目的のために収集されたアイルランド標準英語 100 万語を収容している International Corpus of English for Ireland (ICE-Ireland)です（詳細は https://www.ice-corpora.uzh.ch/en.html をご参照ください）。さらに、付属の SPICE-Ireland コーパスは、ICE-Ireland の話し言葉を取り扱い、語用論と談話分析について注釈を付けています。テキストの一部には韻律特徴についても注釈が付けられています。

しかし、ICE コーパスを研究する上では、直接アイルランドに行くことが不可欠です。現地に行くことで、実際の言語（アクセント、現地用語など）に接すること

ができ、さらに地元の方言に対する考え方や、英語に対するアイルランド語の「言語問題」の見解に触れることができます。国や地方の放送メディア、映画やインターネット素材などの大衆文化を含んだアイルランドのコミュニティに深く関わる必要があります。

アイルランドでは、トリニティ・カレッジ・ダブリン、ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン、クイーンズ大学ベルファスト、リムリック大学を訪問し、アイルランド英語に関する調査とデータ収集を行う予定です。収集したデータは、*Linguistic Soup: Recipes for Success*の改訂版および学術雑誌に掲載する予定です。

６　研　究　概　要

序論

1. アイルランド英語における語彙文化的側面の要素の調査
2. コーパス言語学が地域方言の語彙・文化的側面に与える影響
3. デフォルト、単一島、政治的、および方言歴史的仮説が、地域的・政治的条件を反映した国際方言基準への適合性をどのように決定するかの実例
4. 北アイルランドとアイルランド共和国に独自の文化圏が存在することの論証

アイルランド英語の特徴

1. 方言語彙と標準語の比較
2. 方言と統語論
3. アイルランド英語とゲール語
4. アイルランド方言と音韻論

現在のデータ収集方法

1. コーパス（International Corpus of English for Ireland (ICE-Ireland)）
2. レガシーメディア
3. フィクションドラマ
4. 個人的な会話および観察

研究背景と先行研究

1. カレン・カーク
2. グリーンバウムと比較研究
3. ネルソンと多様性言語

結論と考察

A: アイルランド英語の発展と「標準」言語の継続性を示す ICE-Ireland（コーパス）の長所と短所

B: 方言の変化を説明する上で、4 つの仮説はいずれも決定的なものではない
A. 国境による変化
B. 言語史による変化
C. 一般的な使用パターンと、地域的・文脈的レベルでのバリエーションの組み合わせは、世界中の英語に関する他の研究と同様

現地での活動内容
1. ダブリン大学トリニティ・カレッジの図書館にて、アイルランド英語の地域的、社会的方言の多様性の調査
2. ダブリン大学トリニティ・カレッジのブレフニ・オローク教授およびジェフリー・カレン教授と、アイルランド英語の方言に関する研究について滞在期間中4 度にわたり意見交換
3. アイルランドの地方を訪問し、方言のフィールド・レコーディングおよび、その独特の特徴を分析

7　研究結果・成果

国際英語コーパス（ICE）のデータ---アイルランド、RTC のようなレガシーメディア、個々のコミュニケーション、テレビドラマ---から、アイルランドの各地域でよく知られている文化的レファレンスが数多くあることがわかる。これらの用語の多くは、日常的に親しまれている単語が特殊な意味や変化した意味で使用され、それによって特定の文化的価値が表現されている。こうした単語や表現はいずれも 1 つの伝統的な方言に属さず、アイルランド語に属するのは一部のみである。むしろ、それらは英語の意味上の拡張や再機能化であり、その結果、北アイルランドとアイルランド共和国というそれぞれの国家のために細かく刻まれた文化的語彙が生まれたのである。また、これらの言葉は、一般的な英語に精通した者にとっても、理解することが不可能である。

この調査結果により、現行の ICE – Ireland を補足する包括的な文化用語集の有益性を考えるに至った。このような用語集は、「標準」言語がアイルランドやその他の地域で話されている他の種類の英語との連続性や接点をどの程度維持しているかを示す上で重要な役割を果たす。序文で述べた仮説に関しては、サンプリングされたすべてのデータを説明する単一のパターンは存在しない。前述したように、アイルランドの文脈で調査された英語は「標準英語」と多くの共通要素を有するが、方言や言語の歴史の違いや変化の速度の違い、言語選択のその他の側面によって生じる変動性がある。研究者のデータから浮かび上がってくる全体像は、一般的な使用パターンと地域レベルおよび文脈レベルでのバリエーションの組み合わせが、世界中の標準英語に関する他の研究にも当てはまるということである。この調査では、世界標準に基づく地域変動を発展させることの意義について、構造的に調査することができた。世界の英語におけるこのような多様性を理解することで、言語が

（ 様式D－２ ）

多様性、継続性、変化を管理する方法についてのさらなる研究が促進されることが予測される。

以　　上